



沈氏翰文

大名縣沈翰文



沈氏翰文

沈氏翰文

331 5088



寺青出仕有長  
 觀於焉而京崎  
 之崎頃諸畿土  
 美陽文邦名產  
 紅山竺相勝序  
 毛水王蹟圖  
 胡山人叢繪  
 商勝丹而之

晴  
 任  
 氏  
 白  
 庭  
 書



崎  
 崎  
 書  
 房



文  
 為  
 善  
 保  
 身

崎  
 山  
 產

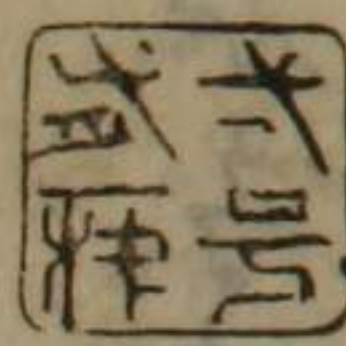
全  
 一  
 卷

大  
 和  
 屋  
 正  
 鋪  
 上  
 梓



吳越西檝等之數條  
名曰長崎土產欲使  
人人不吝必親入筭境  
而哭知其勝狀壯觀  
請說於余余官講經  
不暇固辭強止曰錄

其大指凡贈王人云  
弘化丁未春二月  
有奉情農饒田  
集義  
唐少原書  
王孫



此の都を夫の遠く國人の母あふに  
 其のこころをくしく長空の土産と記し  
 してふ乃おもひのあまうしに  
 磯野文島らの長空の名をうける所  
 史のれりまきてまをたるとしてこむ  
 此の都を夫の遠く國人の母あふに

此のたもこのあまうしに  
 海のまをたもこのあまうしに  
 地をたもこのあまうしに  
 とあまうしに  
 此のたもこのあまうしに  
 此のたもこのあまうしに





石井の日記の事、此の如く申す可い事、先づ  
 其の如く申す可い事、先づ此の如く申す可  
 い事、先づ此の如く申す可い事、先づ此の  
 如く申す可い事、先づ此の如く申す可い  
 事、先づ此の如く申す可い事、先づ此の  
 如く申す可い事、先づ此の如く申す可い  
 事、先づ此の如く申す可い事、先づ此の

此の如く申す可い事、先づ此の如く申す  
 可い事、先づ此の如く申す可い事、先づ  
 此の如く申す可い事、先づ此の如く申す  
 可い事、先づ此の如く申す可い事、先づ  
 此の如く申す可い事、先づ此の如く申す  
 可い事、先づ此の如く申す可い事、先づ  
 此の如く申す可い事、先づ此の如く申す  
 可い事、先づ此の如く申す可い事、先づ



一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

研聖信云

日本弘化二年乙巳中 槐月十日 稿

京崎館保書

山園都邑在西邊百里出

終是洞天岸列層城分

西成港廻一水引 羣川孔毛

綠眼法醫 冥非西翠明珠於

越船

至代乃去 柔遠化殊方 重譯尚津

年

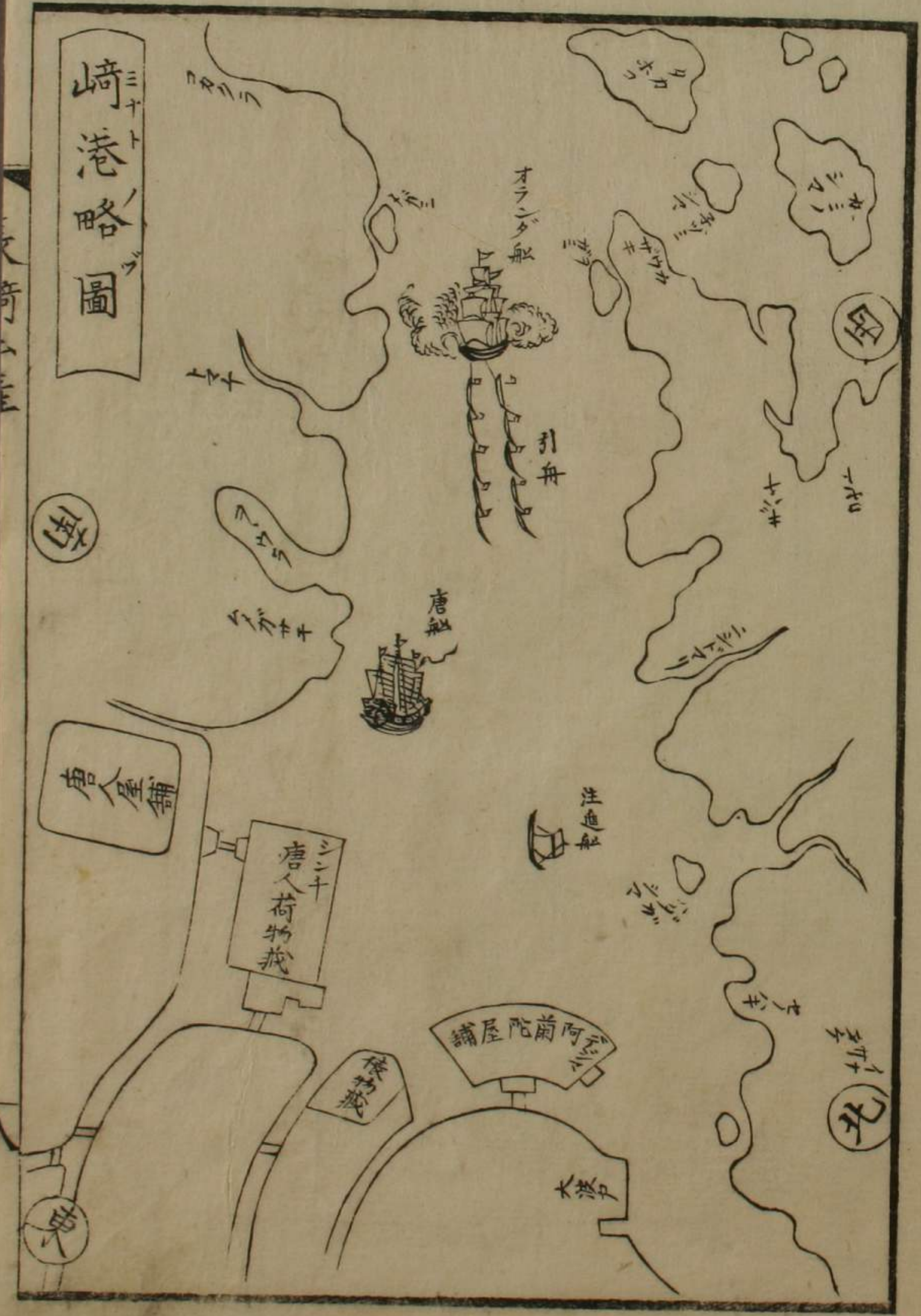
勾吳沈萍魚



日野前大納言資枝卿御歌



唐人地美心多奈  
 布留船あゆ多味  
 那冬能とりりか  
 波志阿さ那岐洋史



タウジン  
清朝人

春去去末忽一  
年客逢元旦似前  
綠屠菘淺飲三  
杯醉 桃符高愈萬  
戶連花媚鳥鳴增  
翠月風佳日翼  
滿山川 岸家問我  
崎陽事 細說雍穆  
竟舞天

朱子章



長  
山  
土  
產

長崎土産



HOLLAND SCHE

人毛紅

uürmerk.

クロボウ

長崎土産



九



珠々たる海に舟楫ハ云の如くあり 素宗堂

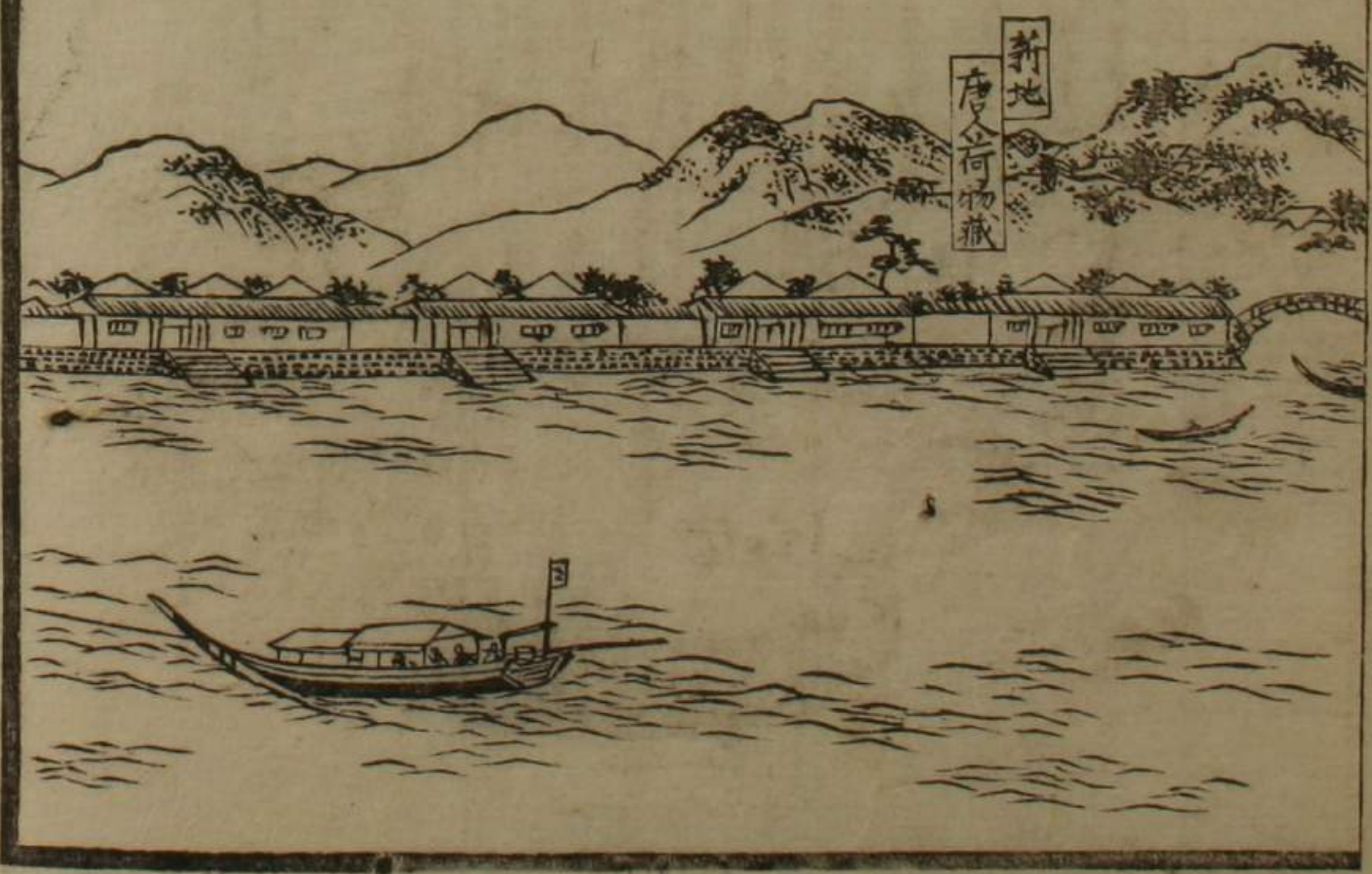
長崎二巻

十



青雀飛來泊河邊信通吳  
越意無強年々中土人面  
此應道崎陽別有天

孫靜漪



長崎二巻

明笛何人慰静閑  
 昏前皆聽弄易關  
 清涼声散泛樓夕  
 夢落勾吳於越間



唐  
 ヤシキ  
 館



長崎土産



東海墓ハ澤司東  
海氏ノ墓ナリ春  
徳寺後山ノ半腹  
ニアリ石門石欄干  
ヲ設ケ牆壁ヲ圓ニ  
シ花卉ノ雕飾アリ  
或ハ文字ヲ刻ス尤  
其巧ヲ尽セリ



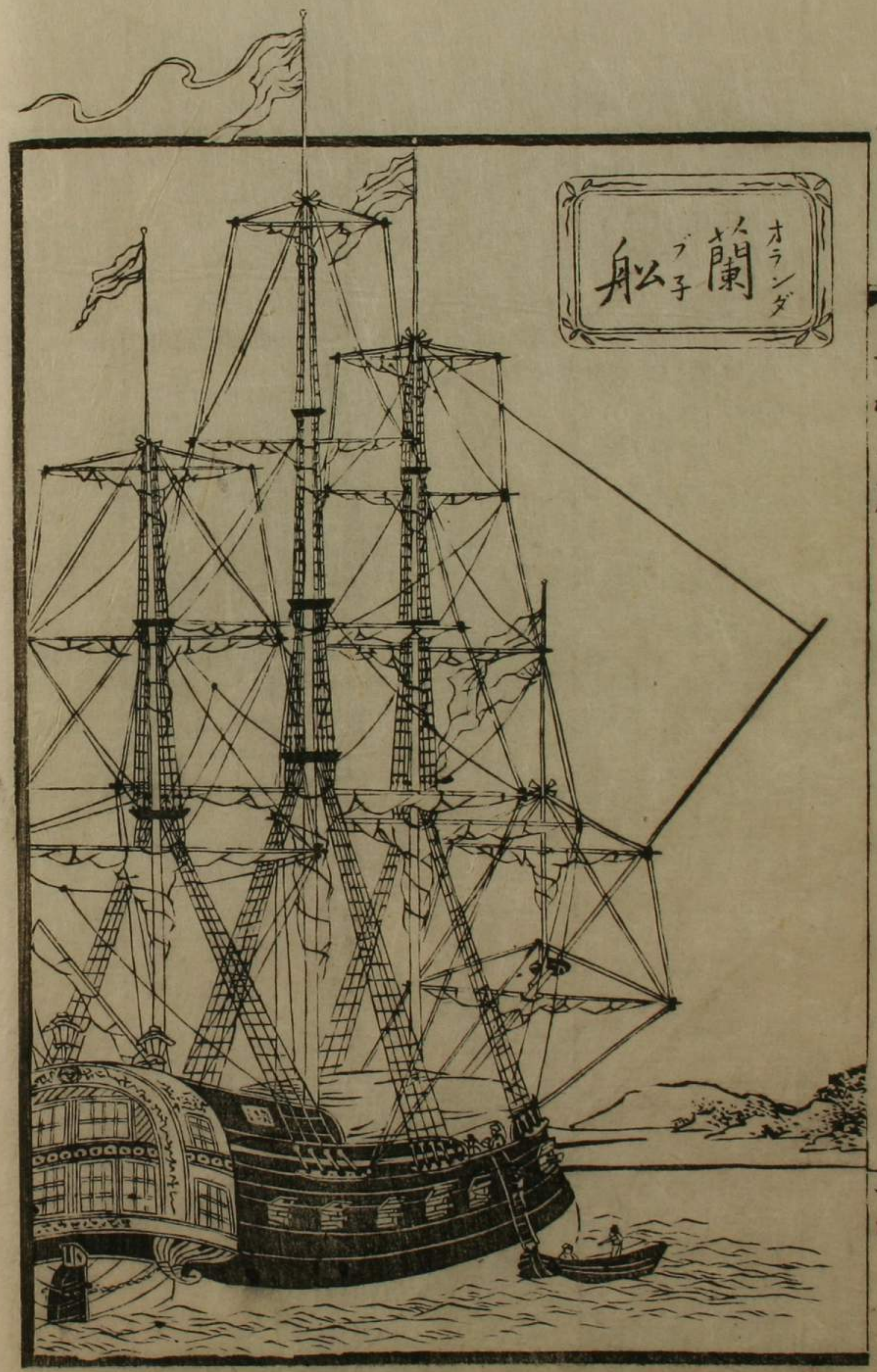
目鏡橋



長崎土産



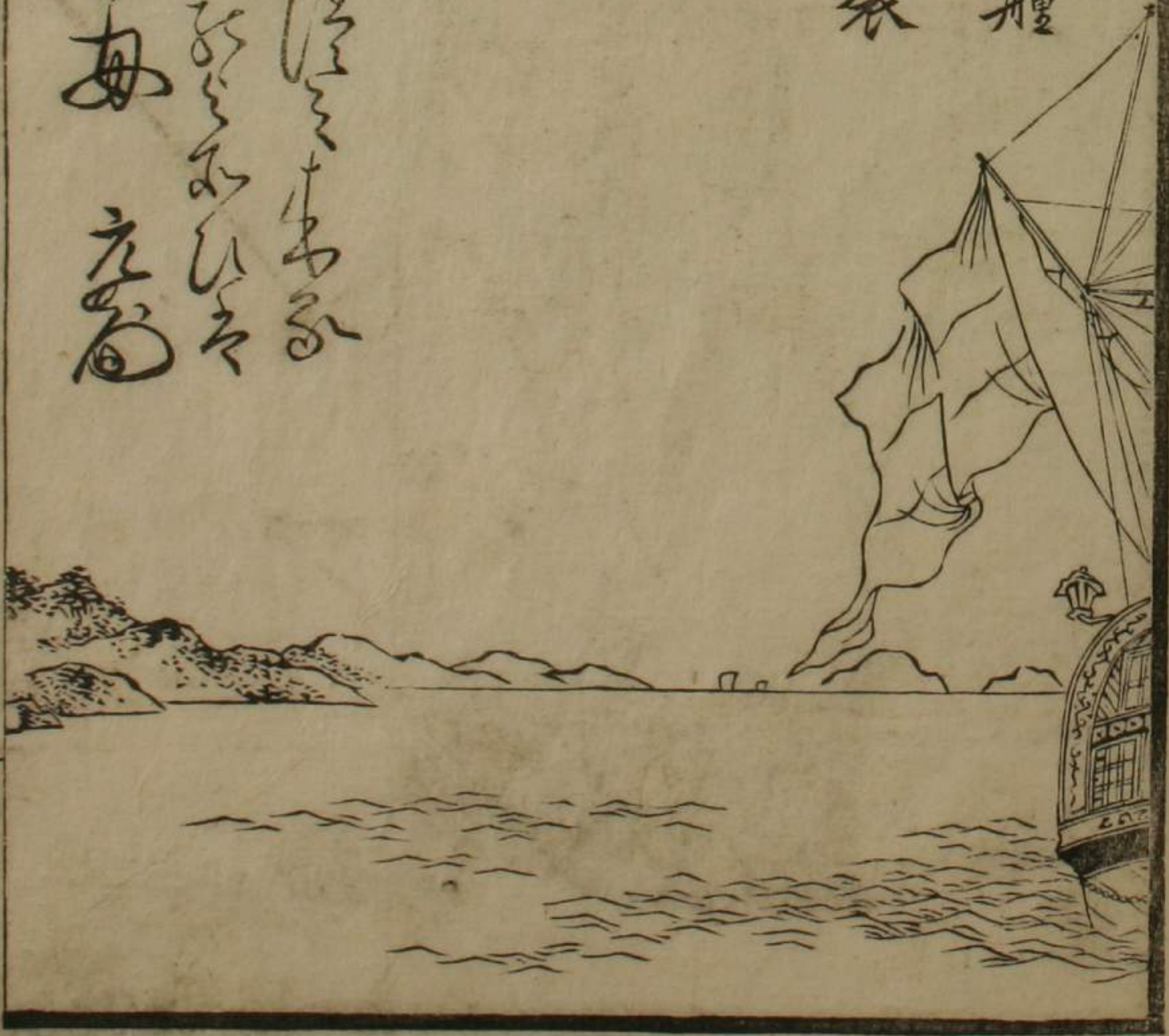
オランダ  
船  
子  
蘭



紅夷 萬里外 船  
通貢 来港 口 將 裂  
巨炮 聲ノ 半 雷

去 延 齋

中 國 船 隻 中 國 船 隻 中 國 船 隻  
外 國 船 隻 外 國 船 隻 外 國 船 隻  
小 船 大 船 小 船 大 船 小 船 大 船





扇嶼夕照

高鳴 音全

夕日さくらんぼのしほれ  
 らあめなまも  
 まくゆりりりりり

天守の屋



オランダ館

丸山遊女

長崎の街

Holland vronst

文政己丑七月蘭船載一婦人未町埜  
 萊列奴之妻名彌、年十九隆鼻深目肌  
 膚透莹景巧女技旁吾書画聞婚後二  
 閱月其夫祇役于日本繼之情不忍離  
 吾故未云



OLIFANT

文化十癸酉紅毛船持渡  
 象牝 出所セイロン  
 歳三才  
 高六尺五寸  
 頭ヨリ尾キハ迄七尺  
 前足三尺  
 後足二尺五寸  
 足回り二尺五寸  
 鼻長三尺五寸  
 尾長四尺五寸



長崎



社方諫



海をく吹らすぬは此山凡のぬえし及てぬ社方のやろ  
 志のこはちきりも九子長崎やまもの北よりうらやあーて  
 冷泉前大納言為村卿

車圖



何とす体  
 之つち  
 第代子  
 主妻  
 以ま  
 海園の  
 神  
 大納言  
 本母波守水喜

其二  
神事  
踊子



九月神楽出向  
宮終、百戲市  
西東、絳囊誰佩  
菜蔓、女衣服言  
裁總、角童垂尾  
看棚、弦曲卷繁  
絃急、管列列工  
若狂、終日人皆  
醉、應与周時  
八塔同

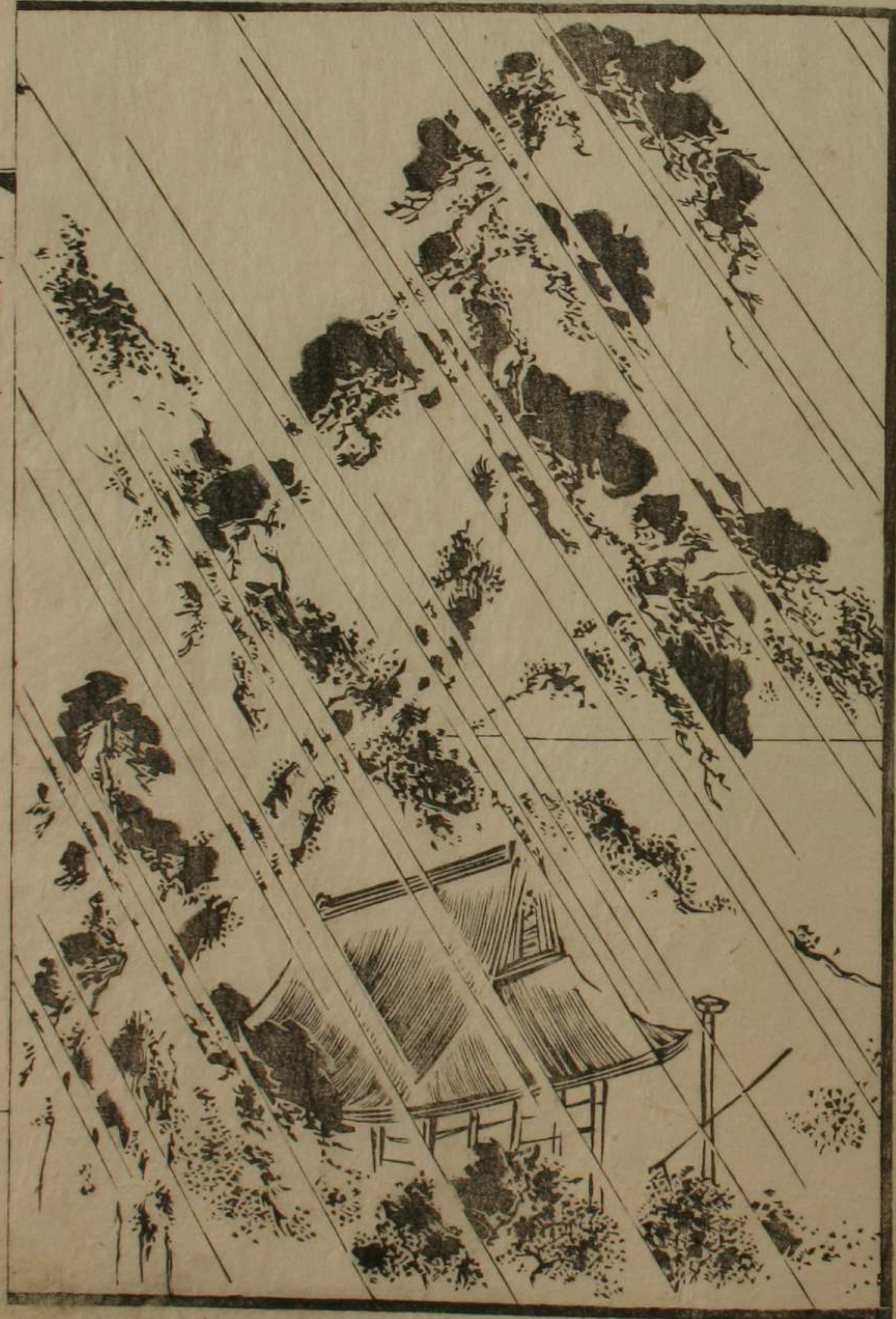
左向、南取



朝鮮人



長山土庄



長崎



御崎

慈像千年八尺高通身手臂不知勞  
 氣衝妖孽空羣滅影射魔軍拂地  
 塵一鎮御崎多象利七分名利放圓  
 毫行基到處便生事 眉目依然  
 菩薩象

高玄成

イハウジマ

長崎

十



天空海阔无边地  
 帛伏龍降不二門

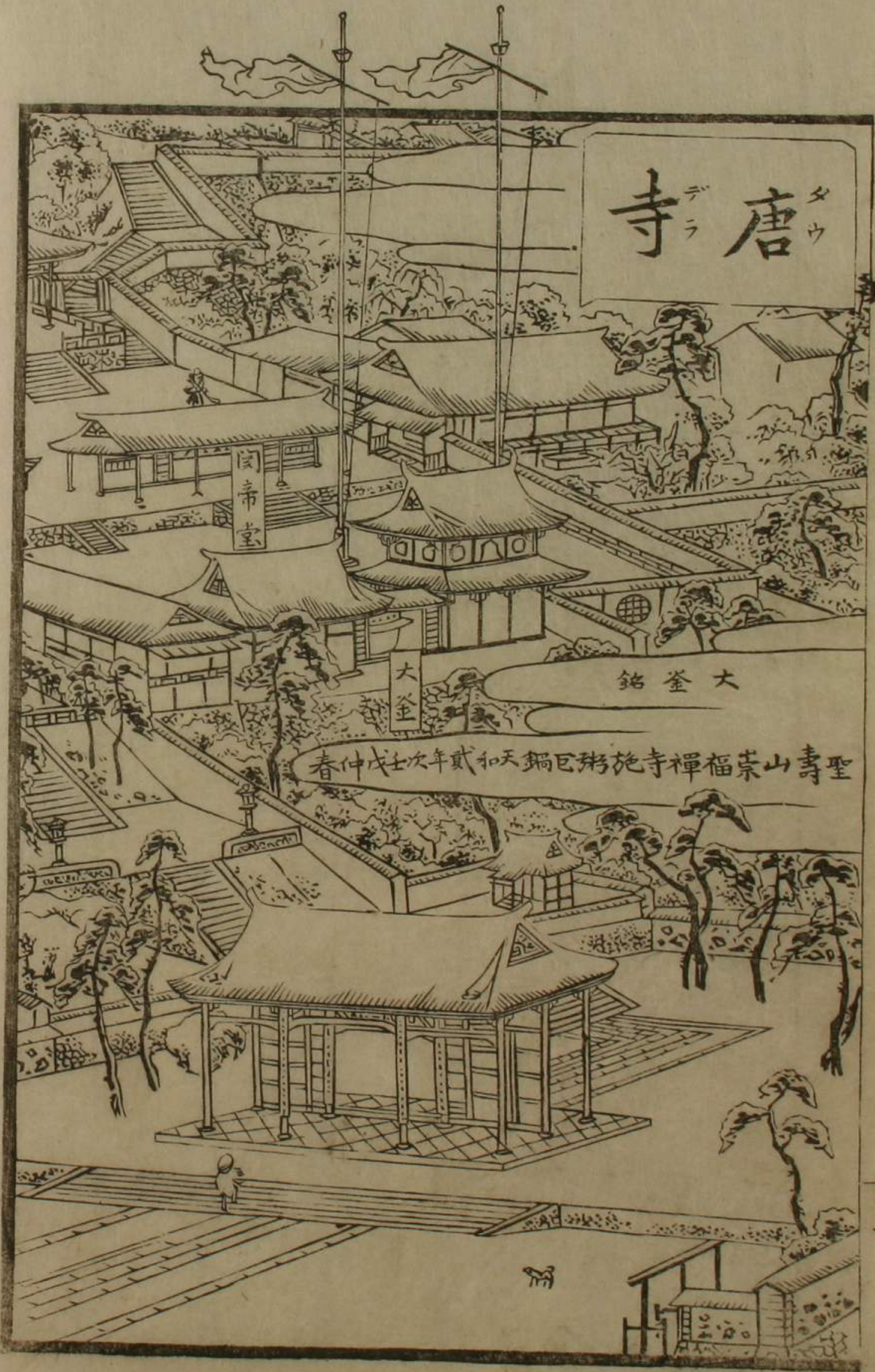
第一峰

中門

大奇

全

唐



唐寺

大釜銘

聖壽山福禪寺施粥巨鍋天和貳年次壬申春

國帝堂

大釜

長山寺

九



百尺松杉作翰屏重、接閣迥  
蒼冥象玉隔水天然白獅子臨  
春分外青十里煙花歸指顏  
千家燈火照禪高雲堂梵靜聞  
箫鼓中國帆檣泊晚汀

唐山道本



長崎土産

唐館

唐館造立の事ハ元禄元年戊辰九月廿五日経営始りて  
翌年の四月十五日小功成就ととて  
唐船の入津を以て事々夏船冬船とて年々小兩度有り已  
港小来り破り入きその後ハ唐人悉く館内小移り也と載来  
所の貨物皆新地乃庫入きおろる貨物運送の時ハ諸吏是  
代監一丸荷役精荷役等の名目有り船中人衆乃名称也

正船主頭 大船副船主頭 財副 總管 客長 板主

影長 ホウキョウ 按針役也 アヒナジ 船中水手ヲ フネナウ 影計ト云 カゲケイ 按針役ハ針ヲ アヒナジ 考ヘ方角ヲ カタカク 教ヘ水手ヲ フネナウ 下知シテ シメテ 船

舵工 クワシ 後也 ノチ 頭控 カウシ 後 ノチ 香工 カウシ 船魂神ニ フネマタ 香 カウシ 押工頭 オシカウシ 大工 オシカウシ 押工 オシカウシ 直庫 ナウ 大鼓 オシカウシ

大繚 オシカウシ 後 ノチ 一什 イツッセン 大帆 オホホ 二什 ニッセン 帆 ホ 三什 サンッセン 帆 ホ 亞板 アバン 柱 ハシ 後 ノチ 總喃 ソウナン 贈 オウケ 後 ノチ 老大 オウダ

頭工社 カウシ 木手ナリ キテ 長崎ノ俗 ナガシキノソク コクシヤト コクシヤト 新スルハ ニウスルハ 小廝 コウシ ナリ等 ナリトウ あり

新貨庫 ニウカ 唐館 オウカン 北西 キサイ の海中 ノナカ 小あり コアリ 元禄十五年 ゲンロクニジュウゴトシ 建唐船 ケンオウフネ 乃

貨物 カモノ を入 イル きお オホ かり カ 處 トコロ あり

唐人踊 オウジンマシ ハ春二月 ハハルニグヒ の初 ハジメ 小 コ 行 イキ 土神祠 ツチカミミヤ の祭禮 マツルヒ あり アリ 二月二

日 ヒ と祭日 マツルヒ と ト 前後 マエノチ 三日 ミツヒ 乃 ナラバ 間 マヒ 此事 コト あり アリ 土神祠 ツチカミミヤ の前 マエ 高大 タカシ

あり アリ 舞局 マシ の臺 イハ 設 セ ち チ 拵 ハ 色 イロ 小粧 コシヨウ ひ ヒ 在 イ 館 カン 唐 オウ 人 ジン

其事 コト 小 コ 巧 カウ あり アリ の 撞 ツキ の衣冠 イカウ 袷束 アサヒ 着 キ け ケ 綾羅錦 ヨロイ 繡 ウツ と ト 装 カウ け

臺 イハ 上 ノウ 出 デ て テ 歌 ウタ 舞 マシ 成 ナリ たり アリ 其事 コト 休 ユ 水 ミヅ 許 ヨリ 傳 ツタ 三 サン 國 クニ 志 シ 或 シ 八 ハチ 棹 サウ 官 クワン

小説 シヤウセツ の内 ウチ 代 ダイ 用 ヨウ の ノ 多 タ 多 タ 樂 ガク 器 キ ハ 鈿 ケン 鑼 ラ 拍 パク 板 バン 囉 ラ 吹 フイ 鈔 セウ 鑼 ラ 笛 フエ 大 ダイ

鼓 カウ 片 カハ 張 チヤウ と ト 提 チ 琴 シン ハ 朋 トモ 及 キ 柄 カウ と ト 小 コ 竹 タケ 以 ヨリ て テ 此 コノ 皮 カウ と ト 張 チヤウ り リ 二 ニ 腕 ウデ の ノ 糸 イト と ト 竹 タケ

尾 ビ 通 トウ 一 イツ 提 チ 琴 シン ハ 三 サン 弦 ケン ハ 木 キ 一 イツ 作 サシ り リ 蛇 ヘビ 皮 カウ 以 ヨリ 張 チヤウ り リ 糸 イト 三 サン 筋 キン

以 ヨリ て テ 摺 ス り リ ち チ ち チ 三 サン 弦 ケン ハ 木 キ 一 イツ 作 サシ り リ 蛇 ヘビ 皮 カウ 以 ヨリ 張 チヤウ り リ 糸 イト 三 サン 筋 キン

○金毘羅山紙式鳥會

金毘羅山 キンピラヤマ ハ崎 サキ 中 ナカ の北 キタ あり アリ 一名 イツナヒ 魚 イサ 丸 マル 山 ヤマ 又 マタ 瓊 ユヅリ 杵 シ 山 ヤマ と ト 云 イハ 麓 アシタ 小 コ 曠 カウ 野 ノ

あり アリ 三月十日 ニグサツニジュウニチ 金毘羅 キンピラ 大 オホ 権 ケン 現 ゲン の祭 マツルヒ 日 ヒ 小 コ 一 イツ 其 ソノ 日 ヒ ハ大人 オホタチ 小 コ 兒 コ 各 オノオノ 行 イキ

厨<sup>く</sup>場<sup>ば</sup>へ酒<sup>さけ</sup>樽<sup>づ</sup>を擁<sup>よう</sup>して曠<sup>くわう</sup>野<sup>の</sup>を以<sup>もつ</sup>り紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>小<sup>こ</sup>硝<sup>しょう</sup>子<sup>し</sup>は紙<sup>かみ</sup>はけ  
 共<sup>とも</sup>に勝負<sup>しやうぶ</sup>を以<sup>もつ</sup>て決<sup>き</sup>をすれ紙<sup>かみ</sup>はけはけと云<sup>い</sup>蘭<sup>らん</sup>人<sup>じん</sup>は持<sup>もち</sup>渡<sup>わたり</sup>ふ硝<sup>しょう</sup>子<sup>し</sup>  
 器<sup>き</sup>の割<sup>わり</sup>は紙<sup>かみ</sup>至<sup>いた</sup>極<sup>ごく</sup>細<sup>さい</sup>末<sup>まつ</sup>小<sup>こ</sup>し糊<sup>か</sup>和<sup>わ</sup>し是<sup>こゝ</sup>を草<sup>くさ</sup>と云<sup>い</sup>ぬ日<sup>ひ</sup>  
 乾<sup>かわ</sup>し束<sup>たば</sup>ぬ置<sup>お</sup>名<sup>な</sup>は硝<sup>しょう</sup>子<sup>し</sup>と云<sup>い</sup>紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>の糸<sup>いと</sup>時<sup>とき</sup>小<sup>こ</sup>紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>放<sup>はな</sup>  
 入<sup>い</sup>と云<sup>い</sup>ふは臨<sup>りん</sup>で是<sup>こゝ</sup>紙<sup>かみ</sup>五十<sup>ご</sup>間<sup>ま</sup>百<sup>ひゃく</sup>間<sup>ま</sup>紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>の大小<sup>たいせう</sup>小<sup>こ</sup>よりて  
 着<sup>つ</sup>け手<sup>て</sup>許<sup>ゆる</sup>ハ皆<sup>みな</sup>平<sup>へい</sup>生<sup>せい</sup>乃<sup>の</sup>草<sup>くさ</sup>は紙<sup>かみ</sup>用<sup>もち</sup>の紙<sup>かみ</sup>と云<sup>い</sup>て根<sup>ね</sup>と云<sup>い</sup>  
 互<sup>たがひ</sup>に此<sup>こゝ</sup>法<sup>ほう</sup>を以<sup>もつ</sup>て紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>放<sup>はな</sup>つ野<sup>の</sup>を隔<sup>へ</sup>る谷<sup>や</sup>紙<sup>かみ</sup>越<sup>こ</sup>て空<sup>くう</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>こ</sup>以<sup>もつ</sup>  
 相<sup>あひ</sup>争<sup>あそ</sup>ふ彼<sup>かの</sup>より此<sup>この</sup>より交<sup>ま</sup>り風<sup>かぜ</sup>不<sup>ふ</sup>来<sup>き</sup>と云<sup>い</sup>摺<sup>すり</sup>合<sup>あ</sup>違<sup>ちが</sup>小<sup>こ</sup>切<sup>き</sup>きそゆ  
 紙<sup>かみ</sup>負<sup>ふ</sup>と云<sup>い</sup>む且<sup>かつ</sup>風<sup>かぜ</sup>の強<sup>つよ</sup>弱<sup>じやく</sup>小<sup>こ</sup>より勝負<sup>しやうぶ</sup>乃<sup>の</sup>速<sup>すみ</sup>速<sup>すみ</sup>なり能<sup>あた</sup>揚<sup>あ</sup>る

切<sup>き</sup>る時<sup>とき</sup>を雲<sup>う</sup>小<sup>こ</sup>入<sup>い</sup>り霞<sup>か</sup>小<sup>こ</sup>消<sup>しょう</sup>て境<sup>けい</sup>紙<sup>かみ</sup>越<sup>こ</sup>ておろ素<sup>す</sup>くを業<sup>わざ</sup>乃<sup>の</sup>紙<sup>かみ</sup>  
 其<sup>その</sup>人<sup>ひと</sup>の手<sup>て</sup>の裏<sup>うら</sup>小<sup>こ</sup>あり紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>の製<sup>せい</sup>一<sup>いつ</sup>と云<sup>い</sup>ふは此<sup>こゝ</sup>時<sup>とき</sup>や  
 專<sup>せん</sup>ら紙<sup>かみ</sup>用<sup>もち</sup>の紙<sup>かみ</sup>鳥<sup>とり</sup>の製<sup>せい</sup>作<sup>さく</sup>小<sup>こ</sup>し風<sup>かぜ</sup>放<sup>はな</sup>ちて  
 左<sup>ひだり</sup>右<sup>みぎ</sup>と云<sup>い</sup>ふ便利<sup>べんり</sup>何<sup>なに</sup>も凡<sup>たゞ</sup>はけに至<sup>いた</sup>りて見<sup>み</sup>草<sup>くさ</sup>の樂<sup>がく</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>は非<sup>たゞ</sup>亦<sup>また</sup>春<sup>はる</sup>時<sup>とき</sup>の奇<sup>き</sup>観<sup>かん</sup>なり

目鏡橋

酒<sup>さけ</sup>屋<sup>や</sup>街<sup>まち</sup>小<sup>こ</sup>あり寛<sup>かん</sup>永<sup>えい</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>年<sup>ねん</sup>興<sup>きう</sup>福<sup>ふく</sup>寺<sup>じ</sup>住<sup>ぢゆう</sup>持<sup>ぢ</sup>唐<sup>たう</sup>僧<sup>そう</sup>如<sup>にょ</sup>定<sup>ぢやう</sup>築<sup>ちく</sup>是<sup>こゝ</sup>長<sup>ちやう</sup>崎<sup>き</sup>  
 石<sup>いし</sup>橋<sup>はし</sup>の始<sup>はじめ</sup>也<sup>なり</sup>慶<sup>けい</sup>安<sup>あん</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>平<sup>へい</sup>戸<sup>こ</sup>氏<sup>し</sup>好<sup>こう</sup>夢<sup>む</sup>と云<sup>い</sup>ふ人<sup>ひと</sup>重<sup>ちゆう</sup>修<sup>しゆ</sup>せ其<sup>その</sup>形<sup>かたち</sup>  
 象<sup>さう</sup>の似<sup>に</sup>ふ紙<sup>かみ</sup>以<sup>もつ</sup>て目<sup>め</sup>鏡<sup>きやう</sup>橋<sup>はし</sup>乃<sup>の</sup>名<sup>な</sup>紙<sup>かみ</sup>得<sup>と</sup>り

紅毛船

紅毛船の来津をば、季夏を初秋に至るまで、候々  
 其始り寛永十八辛巳の年より、今に至るまで、年おとに  
 ちとふし、渡来の紅毛人乃、名稱を、ツッフルホーフトツル

- ハツクホイスイートル 船とば デイスベンシール 厨所諸雜費支配後 ニゴーレ
- セイブツグホードル 高賣物 シキリイバア 筆者 アレステナント 筆者
- ツッフルメーストール 上外 シンドルメーストール 下外 ホフメーストール 厨所後
- ス子イエル 縫物 テイニムルマン 大工 カビタイン 船頭以下 カビタインロイ
- トナント 上接 ロイトナント 針後 シウロイトナント 針後 シウロイトナント 又ハ、カツテツトマ デルテ

紅毛館

紅毛館ハ海中、小島を、門前ハ、即ち江戸街通り、杖ち扇面  
 似たり、扇と稱し、俗小出島と云、館中、おおて年々

- メーストール 料理 ボーツマン 船水手頭 ホーツマンスマアト 日午 シキイマン
- 荷物入所 井表柱 レキイマンスマアト 日午 コンスタールブル 石火矢後、并洋中、小、で、破網支配人
- やり出、追の支配人
- コンスタールスマアト 日午 ボトリイリス 厨所、煎并食用之品支配人 ホトリイリスマ
- アト 同手 コック 料理人 コックスマアト 日午 シケーブステイニムルマン
- 船大 エ セイルマール 帆縫 スミツツ 銀治 コイフル 桶細 クワルテイル
- メーストール 船支配并水手夫 トロンベツトル キヤルメ 等をわ

定まる 祝日ハ阿蘭陀正月 冬至の後十二日 戦勝日 彼國の六月十八日

五月節の後十一二 日比ふあり 紅白青の旗は建て盛饗を設けりて 彼中大に賑は

せり之に食冊は奉ぐ

阿蘭陀正月献立

大蓋物 味噌汁 鶏の皮 大鉢 潮煮 鯛魚 鱈魚 鉢 牛乳 鉢 牛乳

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨 鉢 野鴨

食小粒一升又コーヒー日本の大豆小粒 是代磨一碎き湯水

小入き煎白糖と加へ常服我國の糸代用が如し

○大波戸鉄丸

大波戸ハ波戸場なり西衙の下にあり廣さ東西七間南北北五間北の方豎十四間横五間半の入海なり是風波烈し時後船代挽入を風を凌ぎ波不便りて置かざる也側小鉄丸あり周圍五尺八寸重さ唐目一千餘斤といふ即石火矢の玉なり

○聖靈祭

聖靈祭ハ例年七月十四日十五日あり同十三日の昼後を至家く別壇代設き其上小菰の編み布を志比名づけて聖靈菰といふ 佛間の位牌代移して立并べ是代聖靈棚と稱す代々の諸聖靈此夜の丑乃刻を待て我家く小入り来候とて婦人女子圓圍盛饌の設け代を門小八家紋とつけ大なる燈籠代挑ぐられ代門燈籠といふ古風代守々菰ハ深更不至りやぐ戸と鎖ごりて之代平夜愚老姫の輩ハ実不亡者の十万億里乃浄土を至銀難辛苦し々来々と思へり又棚経と云事何を雲水の僧諸宗此比丘尼等案内もむごり々家く小突入りて靈前小向ひて誦経

本名は多々々柵経といふ是許多の布施物成利する小あつて  
 同十四日種々の佳饌成設け朝夕靈前小供ふ尤料理は皆人先  
 祖より仕来り有る老婆をどつ家へ堅くこれ成守て  
 古式成変む事なし此日申の中刻比よを男女各行  
 厨成携へて墓所小至り酉の刻ころ成待て燈籠成塔前小  
 挑ぐ一所の點燈或ハ三十或ハ四十新死の家ハ百餘燈小つる  
 是親族知音の贈り処ある墳墓ハ預け燈籠掛成あり  
 といへこれ成掲ぐ諸吏ハ多く上下成着し高家ハ平服小て  
 参詣小家下賤の輩ハ塔前小送成展へ毛氈成鋪て酒

宴成催し相共小奉と打て與成催を元て長崎の地ハ山々相  
 環る其よりハ皆梵刹相連ある処也一教多の墳墓小萬燈  
 成點したはさう他邦小比類ある因て羈旅成僧俗一ハ  
 これ成祀する各奇觀と称せざるあり一板成の中刻ころ小  
 至て山々数万の點燈漸く小消滅し人皆山成下りて家へ  
 歸り因て墳墓點燈の間ハ老漢阿婆成家成守りの又  
 諸國遍歴の僧侶回國六部乃徒家への門小立ち鉦成叩き  
 木魚成打て回向し念佛の聲り傳ひし

附 法皇成といふ事あり家へ聖靈の壇成小無縁の靈魂成

祭王御、供饌の餘り成供人朝夕取おうるに臨んで奴婢  
もいれ成食さる事と思む故小非人乞食の輩等比  
王小田子より籠成提げぬを乞ふて町成廻る名成  
けて法界飯とよ

同十五日竟祭王并墓所参詣十四日の式成始一此夜丑の刻  
至聖霊流あり預め竹成撓め舟の形成造り麦藁  
成以てこれとつみ潮水の防と一帆柱成立て白紙を以て  
て帆と舟成極楽丸西方丸弘誓丸浄土丸或ハ六字成  
名号七字の題目各宗首小随ふ成りて大書一又ハ觀

音地蔵の像成画き四更の鐘を聞て皆茶成煮て靈奠小供  
是成三番茶と云ふた流一送るも  
もろ龍家のりをも煮て供成あり 暫く有て供物の湯團菓実の類  
悉く壇上よりおろして藁舟小棹と舳舳小舟數十の竹乃舟  
成設る々線香成ら種々の燈籠と小さ成繩の上小挑ぐ吏  
人巨高の家ハ奴婢これ成肩小一貧賤のものハ父子兄弟これ  
成昇て海濱小送るも素より船具成設けあり一風小任て  
飄蕩一水面又帆星出恰も舳乃煩凡相送り洋中小漂ふが如  
通俗これ成聖霊流一とよ町小家下賤の輩八家とよに  
舟成造る々々近隣町内とやいて巨舟一艘成製作して



相共小供物成積り家々とも燈籠と持出て船艦帆柱等  
 小舟の燈籠成挑げ外小造り物成る一船の先立て  
 町中一途中雙盤と叩き鉦成鳴一音小念佛成  
 唱へて送る其聲喧しくあそ乳見もいふが為小睡り成  
 覺るにいつる通衢觀者堵の如一流一場ハ多く大波戸  
 あり見物の男女見輩肩成よるを群集と云ふ新死の  
 家ハ若聖靈と稱し一家名残成惜み五更小玉成前  
 後の賑ひ曉天小いりて止む

諏方社

諏方の社ハ長崎鎮守の神社小々祭所の神三柱なり中取  
 方大明神左森崎大権現右住吉大明神なり往古ハ三社各別  
 所小町を鎮座の始り成詳るにせむと奉祀成係已  
 小久一爰小肥前佐賀の住青木賢清金重院其先ハ大職冠録  
 足公の孫太宰少貳藤原廣繼廿六代の後胤青木中務大輔藤  
 原鎮永の三男に一々頗る勇果何を且武術成善を故あ  
 りて山伏とある後の小角北道成字ふ元和中始りて長崎ニ  
 来成然るに元龜天正乃頃よを蛮賊来りて脅かり犯せし  
 より鎮内の神社一時小没倒していり微あり賢清てよ

慷慨一前の宮司の孫公文九郎左衛門小貳一三社併せて  
 同殿小祭り長崎鎮守再興の事以謀る九郎左衛門大  
 歡び一封の譲り状以賢清小典ふ是に於て書以改して  
 京州吉田兼英卿小達より乃処即ち雜掌鈴鹿采女正小  
 命ト答書して許容あり実小元和九年春二月辛卯翌寛永  
 元年官小申一社地以彩以譲る圓山の地今の松林是なり正徳四年此地狹隘小一祭祀以修んで便ありが以て今の圓の地不遷宮ある以寄附せりこれより以後賢清いしく精誠と  
 抽んで欽崇する事固一四九年兼英卿より五更小金重院以  
 宮司とし其子伊兵衛永忠以宮内太輔小任し祠官も補せ

への許一以蒙る同十一年祭祀以修てんとと譲り官府の許諾  
 以得て九月七日九日を以てト一神事以行以神奠御旅所小渡  
 御所を又御供町と稱し通俗神事町又隔町と云町とに名か長崎七十餘町  
 の内十二町府街小圍以と五次以定む即ち舟津町本博多町梶  
 島町平戸町新紙屋町延享八年改て麴屋町馬町本紙屋町濱町銀屋町  
 諏方町これ其時の煩列あり翌十二年凡山町寄合町二町町より官  
 聽小乞て遊女以出し猿樂の曲舞或一切の舞以をして是と小舞とと云小舞と  
 婦人高尾青羽と之を二人の傾城あり廟前小献むこれより後内町外町の諸町これ小慎以  
 見子以して種々の踊を催し其後小役も毛今猶華街の諸町

小魁方踊<sup>おこせ</sup>改<sup>かへ</sup>献<sup>けん</sup>ま<sup>ま</sup>これと職<sup>しやく</sup>と一<sup>いっ</sup>なるあり然<sup>しか</sup>る寛政<sup>かんせい</sup>年中<sup>ちゆうちゆう</sup>故<sup>こ</sup>  
 有<sup>あ</sup>て七日<sup>しちにち</sup>九日<sup>くじふにち</sup>改<sup>かへ</sup>九日<sup>くじふにち</sup>十一日<sup>じふいちにち</sup>と多<sup>おほ</sup>く因<sup>よ</sup>て御供<sup>ごこう</sup>の町<sup>まち</sup>ハ重陽<sup>ちゆうやう</sup>の  
 日<sup>ひ</sup>改<sup>かへ</sup>才<sup>さい</sup>方<sup>ほう</sup>曉<sup>あけ</sup>よる踊<sup>おどり</sup>と出<sup>い</sup>踊<sup>おどり</sup>今<sup>いま</sup>様<sup>やう</sup>本<sup>ほん</sup>踊<sup>おどり</sup>唐<sup>たう</sup>子<sup>し</sup>踊<sup>おどり</sup>風流<sup>ふうりゆう</sup>獅子<sup>しし</sup>舞<sup>まい</sup>  
 踊<sup>おどり</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>踊<sup>おどり</sup>角<sup>かく</sup>力<sup>りき</sup>踊<sup>おどり</sup>狐<sup>こ</sup>竹<sup>たけ</sup>升<sup>のぼり</sup>踊<sup>おどり</sup>あり笛<sup>ふエ</sup>大<sup>おほ</sup>鼓<sup>こ</sup>三<sup>さん</sup>弦<sup>げん</sup>唖<sup>お</sup>吶<sup>な</sup>囉<sup>ら</sup>叭<sup>ぱ</sup>以<sup>い</sup>  
 てそれ<sup>それ</sup>の踊<sup>おどり</sup>小<sup>こ</sup>應<sup>お</sup>とく拍<sup>は</sup>子<sup>し</sup>たて町<sup>まち</sup>の趣<sup>おもむき</sup>向<sup>むか</sup>一<sup>いっ</sup>様<sup>やう</sup>なる又<sup>また</sup>一<sup>いっ</sup>  
 町<sup>まち</sup>の踊<sup>おどり</sup>小<sup>こ</sup>とた笠<sup>かさ</sup>鉦<sup>かね</sup>と称<sup>なづ</sup>するもの何<sup>なに</sup>も是<sup>これ</sup>竹<sup>たけ</sup>改<sup>かへ</sup>組<sup>ぐみ</sup>笠<sup>かさ</sup>と一<sup>いっ</sup>大<sup>おほ</sup>さ五<sup>ご</sup>  
 尺<sup>しち</sup>桶<sup>ぶく</sup>たれく羅<sup>ら</sup>紗<sup>しゃ</sup>握<sup>にぎ</sup>く緋<sup>ひ</sup>色<sup>いろ</sup>賊<sup>ぞく</sup>宋<sup>そう</sup>錦<sup>きん</sup>の属<sup>しゆ</sup>ハ改<sup>かへ</sup>月<sup>げつ</sup>の又<sup>また</sup>金<sup>きん</sup>線<sup>せん</sup>と以<sup>い</sup>て  
 人<sup>ひと</sup>物<sup>もの</sup>鳥<sup>とり</sup>獸<sup>じゆう</sup>花<sup>はな</sup>弁<sup>べん</sup>樂<sup>がく</sup>器<sup>き</sup>等<sup>とう</sup>改<sup>かへ</sup>緒<sup>いと</sup>とあふ一<sup>いっ</sup>笠<sup>かさ</sup>改<sup>かへ</sup>環<sup>わん</sup>りく下<sup>した</sup>小<sup>こ</sup>垂<sup>た</sup>し毛<sup>け</sup>  
 これ改<sup>かへ</sup>呼<sup>よ</sup>で下<sup>した</sup>りといふ其<sup>その</sup>形<sup>かたち</sup>花<sup>はな</sup>蓋<sup>がさ</sup>に似<sup>に</sup>たり上<sup>うへ</sup>と下<sup>した</sup>とあはれ海<sup>うみ</sup>の造<sup>つく</sup>り

物<sup>もの</sup>改<sup>かへ</sup>有<sup>あ</sup>る名<sup>な</sup>はりやた一<sup>いっ</sup>と称<sup>なづ</sup>すた一<sup>いっ</sup>ハ行<sup>ぎやう</sup>草<sup>そう</sup>篆<sup>ぜん</sup>隸<sup>れい</sup>又<sup>また</sup>ハ玉<sup>ぎよく</sup>字<sup>じ</sup>小<sup>こ</sup>  
 て町<sup>まち</sup>辨<sup>べん</sup>と書<sup>か</sup>し右<sup>みぎ</sup>笠<sup>かさ</sup>鉦<sup>かね</sup>改<sup>かへ</sup>踊<sup>おどり</sup>の先<sup>さき</sup>小<sup>こ</sup>と目<sup>め</sup>印<sup>いん</sup>とて踊<sup>おどり</sup>此<sup>こゝ</sup>改<sup>かへ</sup>少<sup>せう</sup>な  
 其<sup>その</sup>街<sup>まち</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>上<sup>うへ</sup>下<sup>した</sup>改<sup>かへ</sup>着<sup>ちやう</sup>各<sup>おの</sup>奴<sup>ぬ</sup>僕<sup>はく</sup>小<sup>こ</sup>挾<sup>あ</sup>箱<sup>はこ</sup>改<sup>かへ</sup>持<sup>も</sup>て儼<sup>げん</sup>然<sup>ぜん</sup>と一<sup>いっ</sup>列<sup>れつ</sup>  
 改<sup>かへ</sup>正<sup>せい</sup>一<sup>いっ</sup>く傳<sup>でん</sup>き後<sup>ご</sup>小<sup>こ</sup>派<sup>はい</sup>方<sup>ほう</sup>の長<sup>なが</sup>板<sup>いた</sup>ハ  
派方の二の鳥居の上一<sup>いっ</sup>郷<sup>ごう</sup>の杜<sup>と</sup>若<sup>わ</sup>雲<sup>うん</sup>  
すまへ門は下あり  
 此<sup>こゝ</sup>れ集<sup>あ</sup>り棧<sup>せき</sup>敷<sup>しき</sup>にハ他<sup>た</sup>邦<sup>はう</sup>此<sup>こゝ</sup>男<sup>おとこ</sup>女<sup>め</sup>蟻<sup>あ</sup>のぶと一<sup>いっ</sup>群<sup>ぐん</sup>り居<sup>い</sup>る踊<sup>おどり</sup>まの  
 始<sup>はじめ</sup>まる小<sup>こ</sup>後<sup>ご</sup>んで衆<sup>しゆう</sup>人<sup>にん</sup>褒<sup>ほ</sup>貶<sup>てん</sup>の聲<sup>こゑ</sup>天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>改<sup>かへ</sup>夷<sup>い</sup>くを同<sup>どう</sup>所<sup>じよ</sup>の踊<sup>おどり</sup>終<sup>は</sup>り  
 て派<sup>はい</sup>方<sup>ほう</sup>森<sup>もり</sup>崎<sup>さき</sup>住<sup>す</sup>吉<sup>きち</sup>三<sup>さん</sup>社<sup>しゃ</sup>の神<sup>かみ</sup>湊<sup>みなと</sup>御<sup>お</sup>旅<sup>り</sup>所<sup>じよ</sup>とて大<sup>おほ</sup>波<sup>なみ</sup>戸<sup>と</sup>の假<sup>かり</sup>殿<sup>でん</sup>小<sup>こ</sup>降<sup>くだ</sup>  
 偽<sup>いつはり</sup>ある是<sup>こゝ</sup>此<sup>こゝ</sup>日<sup>ひ</sup>ハ北<sup>きた</sup>馬<sup>ま</sup>町<sup>まち</sup>南<sup>みなみ</sup>馬<sup>ま</sup>町<sup>まち</sup>  
是片側町あり南北 傍<sup>かた</sup>山<sup>やま</sup>町<sup>まち</sup>横<sup>よこ</sup>町<sup>まち</sup>豊<sup>とよ</sup>後<sup>ご</sup>  
改改て二町とを  
 町<sup>まち</sup>新<sup>あらた</sup>町<sup>まち</sup>堀<sup>ほり</sup>町<sup>まち</sup>本<sup>ほん</sup>博<sup>はく</sup>多<sup>た</sup>町<sup>まち</sup>島<sup>しま</sup>原<sup>はら</sup>町<sup>まち</sup>外<sup>そと</sup>浦<sup>うら</sup>町<sup>まち</sup>改<sup>かへ</sup>以<sup>い</sup>て通<sup>とほ</sup>り筋<sup>すぢ</sup>とて家<sup>いえ</sup>々<sup>々</sup>

小八竹立並べ簾と垂れ幕は張り座敷に移り美酒佳饌を設  
 けて賓客は饗應を見物と云 過く小八男女老幼嬰孩を抱へ  
 童稚は携へて視るもの揃はぬ一涌場は第一諏方社第二西衛  
 第三御旅所第四東衛第五岩原第六縣令以上町々順列  
 成立ておとろ是よりおひく知音の方小玉丸を涌場におた  
 遠近の士女田夫野姫肩はより見物群集成あり  
 御旅所小唐人棧敷あり在鉸は唐人數十人こに到りて涌成  
 又は素も五唐子踊と称するもの唐土は凡俗不慣し水滸傳  
 三國志等此諸書も五抜き取り或は桃園小義成結ぶの踊り

預談雙成報もろの踊又ハ草廬三顔呂望投綸布袋衆見成愛もろ  
 等の趣向其教奉て我之び三四五歳の稚見とね雜王彼國の衣服  
 成着け帽子成若華音の歌成い刺ハ噴納太鼓笛と以て拍子と  
 為も又見物の唐人おのつめ故園の情成動りて涙を伝も  
 あり又ハ舞小入て硝子成算鉦錫の指環これ成揃一て踊子小投  
 典ふもの五羈客おのく其光景成んて感とあるさかハあ  
 又蘭人の棧敷もみ所小あり成きとも是ハ其年の在鉸成  
 甲比丹此心小ゆか又二年定式に名ありを若出てア  
 事あれハ甲比丹邊登苗此茶おのく倚子小憑りて崑崙

奴何とに従人四方の弱を却てふは成るる奇観と一愉快と  
せざるはあり  
甲比丹大波戸小あ事何きい出嶋門前少も找友成  
後ハル平の商人之等にあらまて漏成るるあり

同十一日大槩九日の式比ごとく一兩遊女町并町一踊地趣向成易ふ  
此日ハ外浦町大村町本博多町堀町本興善町豊後町櫻町  
勝山町西馬町通り筋あり踊場ハ御旅所成第一と一西街  
諏方社ハこれに次ぐナリ安禅寺廟前小踊成献するあり  
お九日の後列は準む

神楽渡御九月七日丑刻社司神膳成供一神楽成奏一  
大抜成踊て三柱此神成神楽三基小遷一奉り寛政のころより

同月九日成ト一社頭踊の終る成成て御旅所の假殿小昇入行列の始り  
ハ大鉦 勅裁の綸旨弓楯鎗長刀等此神具其技勝て計ふハ  
神楽此後小ハ社司楽小乗り下巫の面ハ騎馬よて供奉一郷之  
産子幼稚の者ハ白張烏帽子成着て奴隷此肩に据一遠近の  
士女雲のこく 後手は実ハ壯麗なる粧ハあり以前日通依  
七日と御下至九日成御上りと稱一多に今九日十一日成りて  
御上り御下り成唱ふ神楽ハ長崎村此農夫あし一之齊戒  
沐浴一々多勢お圍んでれを肩に長先ハ一々  
警衛一薬師寺氏神室の次第成糾一々啓行と多々其外此

供吏供奉絡繹として排行嚴肅なるを神樂御旅所に遷座  
何り十一日遷御此儀式九日の如し此日廟前鹿皮供を時  
湯立神樂あり其事終りて流鏝馬始まる觀るもの堵垣の  
おとこ此等此式終りて互いにお笑して退散す

○神樂行列の式

但神樂成舞き神具持つもの  
鳥帽子白振着春を下曰

大鉾 五本 皆白の絹袋着く三社の御致藍くて漆む御致へ提の葉 舞方  
三蓋板住吉三ッ巴森崎一本とた郷民三人にて代りて之持つ 猿田彦  
左右小 脚立 六ッ 御旅所にて神樂 三基成おく 弓 数十張

二張立しりて 空徳 楯 長刀 数十振 鎗 数十本 猩々 緋虎皮 投  
靴鎗 数十本 刀筒 数十腰 太刀 白鞘の大なるもの一振あり 高力氏乃奉御多し所あり 法性造曹 数十  
入る

四神鉾 青黒白の緋旗成着一年の御おと  
朱鳥玄武青龍白虎の四獣成おく 獅子 二疋 緋細子成りて形像あり 蓋 数十

小鉾 数十 纏 数十 沓 臺において 割竹 二人 左右において 此と曳く

勅裁繪首 諏方社取締掛街長 社用人 猿樂師 當人町

街長 太鼓 神鏡 臺において青糸の綱成 薬師寺氏 長崎村里長

神樂 三基 一基おとた 駢成那四 大宮司 位階の装束成 祝部 乗物又ハ騎馬時  
小より同トワリ

神馬 三疋 社家 数人 騎馬小 此前後一郷の男女跟後しこれ成御

供と称して、おより後供吏供奉あるに略す

附 神樂御供排列の後華街西町の傾城幼より長小次等し  
左右小立並び舒くとして御供を緋袴の袖羅袴に裳

翩翻と輕風小飄り金釵銀簪白日小輝ぎ清香衣は揉つ  
其行列亦嚴重あり遠近の遊治見ふれがくえん小菟死ひ  
神馳て皆驚奪の契りは冀はふふ所一亦花陽  
る美觀あり

祝島

祝嶋或ハ硫黄嶋深堀の西小阿至長崎國志小ぶりと嶋の北  
浅争んで松浦灣より南の濱浅薩摩灣と云古遣唐使  
此船多く此所浅過るふらつて遂小其名浅命せり今蕃夷  
の来貢と云ふの皆こにらつて路浅取る相傳ふ嘗て俊寛

等こに流さる後深江小ぶりを帰するをこそ古本平家物  
語小治承元年平相國の命とて丹波少将成經平判官康頼  
僧都俊寛三人浅肥前五硫黄嶋小流す二年安徳帝生ま  
給小命とて天下小大赦浅行はる成經康頼赦免浅得たり  
獨俊寛のこふに何らうとて二人甚く憐れ切りいて竟小俊  
寛浅伴多ひ出て鹿背の庄小入し俊寛つね小鹿背に控て  
病で死ぬあつとの墓存せりとてり盛衰記竜造寺家の  
日記に説とす曰と控る小今の本誤りて薩摩の國小放ふ  
下りとて薩摩小亦硫黄嶋のき疑うくハ是其名也

混同せしありむらやむら嶋の内小僧都の蹉跎石成経漱水等の舊跡ありてに長福寺といふ一小寺あり堂前小石碑立て銘淺勒す

御崎

御崎觀音寺圓通山と號す御崎村あり和釘年中行基菩薩の初むる所あり往昔規模雄莊にして数十の僧房あり後元比賊徒過茲侵す小遭以殃こにおんで遺り存する處あり天文六年御崎備後守源廣重かさねて建つ寛文四年僧良圓募り修む今寺の前敷頃の田へ即ち古寺此遺址

あり供する處の千手大士へ行基菩薩此嘗て長良の橋に梁伐取りて七施の像と刻むれ其一あり其材へ榎の樹あり立身高さ七尺其製恰も長谷寺の像小なり此寺昔より此勝區小して靈跡極りて多し元亨釋書釋教好嘗て横川の傍行と曰く諸乃傍地茲遊歴して肥之御崎小なる寺石異木あり事世小なる所也といふ是なり

唐寺

唐寺ハ興福寺 東明山と号す元和九年亥年建 崇福寺 聖壽山と号す寛永六巳巳年建つ岡山唐僧起共福州寺あり 福濟寺 今葉山と号す寛永五戊辰年建つ 之三箇寺あり 岡山唐僧覺悔漳州寺あり



○大金

崇福寺小所り萬人鍋といふ鍋の大小四石二斗は受く天和二年  
當寺第廿四世唐僧千呆これに鑄る此時長崎飢饉にして粥を煮て  
多く餓死せしめんと救ふといふ

○関帝堂

関帝ハ蜀漢の関羽字ハ雲長ありあり元明以来代々殊  
に尊び奉りて妙縣ぶとに皆其初廟有て普くこれに祀り  
関聖帝君と稱す唐三ヶ寺皆奉祀せり

○媽姐揚

唐船渡入て後媽姐揚といふ事あり素より船に媽  
姐棚とて船底の神に祭る所と改けて天妃の像に安置  
し海路の患難ありしむと朝暮祈る既して渡に來り  
碇を引きて後ハ船中乃唐人悉く船内に移りて神  
像と保護する事能はば後以て唐三ヶ寺小輪番に  
追て捧げゆき在津の間北舟渡に托するあり其行装ハ  
香工船魂神小香花の唐人二人燈籠に左右小持ちて並びて次  
に銅鑼と持ち二人左右小次小直庫長さ六尺斗五の持の此小赤泥木箱に後ハ  
此と係其次中央小老媽の像多く木像小く後より團扇にツツしなる像  
あり左右小侍女の像あり或ハ前より千里眼扇耳

の像又ハ神虎カネ置カネも有り  
非虎ハ土神の使ハリ也 儀カネ臺上ハ安置カネして是と捧ぐ後より蓋傘カネ儀カネ掲  
 く守護カネの唐人西三人譯司吏目附添カネづく途中十字街ハ至カネるに  
 銅鑼カネ儀カネ鳴カネく直庫カネと振カネる  
直庫儀ハ振カネる若ハ長袖の紫米儀 鳴カネに振カネる  
 むとまはとも先カネつ直庫カネ儀カネ袖の上ハ横カネ之西足カネとりて地  
 上カネハ心儀カネ文字儀カネ踏カネむと之カネ五振カネり終カネつて東カネハ行カネ人と款カネを  
 北カネハ直庫カネの頭カネ儀カネ東カネハ向カネけ西カネハ行カネくむと款カネを北カネ西カネに向カネく  
 南北カネも向カネくむと儀カネ一カネ振カネりて上下カネハ轉カネト左右カネハ振カネり  
 手カネ足カネ進カネ退カネ種カネく小曲カネ節カネ儀カネあり其カネ手カネ儀カネ数曲カネありて曲カネ々  
 皆カネ名カネありと之カネ其カネ間カネ銅鑼カネ儀カネ打カネ鳴カネく其カネ勢カネを助カネく寺カネハ至カネて

ハ山門中門カネ或ハ閻帝堂カネの前カネ媽姐門カネ媽姐堂カネにて銅鑼カネ儀カネ鳴カネく頻カネに  
 直庫カネ儀カネ振カネるあり他人若過カネちて其カネ前カネと犯カネし通カネる事カネあり改カネて  
 振カネり直カネをい之カネ障魔汚穢カネ儀カネは之カネ以カネ除カネくの志カネとざあり其カネ後カネ  
 老媽カネの像カネ及カネ以カネ直庫カネ儀カネ媽姐堂カネに納カネりて鼓門カネハ歸カネるあり出カネ航カネ  
 其カネ前カネ此カネ像カネと之カネのめく守護カネハ歸カネりて船中カネハ安置カネを定カネふ  
 聖朝カネの徳化カネ廣遠カネハ異邦カネの来貢カネ絶カネつたあり唯カネ長崎カネの  
 繁榮カネのありて亦カネ四海カネの繁榮カネあり

長崎土産 終

下里無名氏



友人文為長時土產樣以圖畫傷友得  
歌女之風身社祭法可觀是余嘗為蜀山人  
歌初一章今附之於卷末以與世好時之志云

玉子  
清の意  
此

江戸溪齋池田英泉  
義信門人

文齋儀野信春著画文齋

淨書

割刷

赤松 霍洲

石上 松五郎 刀



唐紅毛小間物御土産之品数不長崎画圖吳玉人物錦繪於下直奉指上  
長崎令船治屋町角

弘化四丁未年春正月發兌

大和屋由平壽樓

江分目下未年春記民發

大和國由平毒

於說今家名國也

處年乃三國老坑大輪八湖坡其

卷

公

及

於

口



澤

朱

齋



文齋報理計春英德毛齋



後拾心人

江分目下未年春記民發

